The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	ラフカディオ・ハーンにおける「人種」表象 : 長編小説『ユーマ - 西インドの奴隷の物語』を中心に
Author(s)	舞, さつき
Citation	言語文化共同研究プロジェクト. 2016, 2015, p. 37-46
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/57321
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

ラフカディオ・ハーンにおける「人種」表象

——長編小説『ユーマ—西インドの奴隷の物語』を中心に——[1]

舞　さ つ き

１．はじめに

ラフカディオ・ハーンは小泉八雲としても知られる作家であり、日本で広く親しまれている。1850 年にギリシャのレフカダ島で生まれ、1890 年に来日、1904 年に日本でその生涯を終えるまでの間に、ハーンはアメリカのシンシナティやニューオーリーンズ、そして仏領西インド諸島のマルティニークで多くの作品を残している。2016 年 2 月には富山大学で国際シンポジウム「ラフカディオ・ハーン研究への新たな視点」が開催されるなど、没後 100 年以上の時を経た現在、ハーンの作品は様々な角度から再び注目を集めている。彼は、印象記、随筆、物語、論説など様々なジャンルで数多くの作品を残したが、小説として刊行された作品は、『チタ（*Chita: A Memory of Last Island*）』と『ユーマ（*Youma: the Story of a West-Indian Slave*）』の二編のみであり、そのいずれもが女性を主人公とし、カリブを舞台とした作品である。小説第一作目の『チタ』は、1886 年にグランド島で書き始められ、1889 年に単行本としてハーパー社から刊行された。ハーンは 1887 年から 1889 年の 2 年間、西インド諸島に滞在しており、小説第二作目の『ユーマ』はこの滞在期間中である 1888 年から 1889 年にかけて、マルティニークのサン・ピエールで執筆され、『ハーパーズ・マンスリー』の 1890 年 2 月号・3 月号に掲載、同年に、『チタ』と同じくハーパー社から刊行された。

この『チタ』と『ユーマ』の当時の世評は決して高いものではなく、そのためハーンは小説家としての限界を感じ、これ以降小説に手を染めることはなかった。平井（1976）の「八雲の小説」は、ハーンの小説の「弱点」をそのプロットの弱さに求め、「小説の要素でないものに多く興味をもっているのではないかと思われるくらい、小説的効果を無視して、小説的効果のないヴィジョンに力瘤を入れる性癖」（445）があるようだと述べている。しかし、平井はまた、「考えようによっては、これを逆に見ますと、『チタ』『ユーマ』の二編は、異端の文学者ハーンの本領を最も濃厚に表出した作品でもあると考えられる」（446）とも指摘している。そこで本研究では、「ハーンの本領を最も濃厚に表出」していると考えられるこれらの二作品のうちから、混血の女奴隷ユーマを主人公にした長編小説『ユーマ』

[1] 本稿は日本英文学会関西支部大会（於武庫川女子大学、2015 年 12 月）での口頭発表に基づく。

を主な対象として、このテクストに見られるハーンの「人種」表象について分析・考察していく。

２．物語

小説『ユーマ』の主人公ユーマは、副題に「西インドの奴隷の物語（*The Story of a West-Indian Slave*）」とあるように、植民地の混血の女奴隷である。その物語は、1848 年 5 月 23 日に実際に起こった黒人暴動の出来事を素材にしており、ハーンは友人のミッチェル・マクドナルド宛の手紙で、ユーマには実際のモデルがいて彼女を理想化して描いた一方、彼女の行動は史実のままであるということを言及している。

> The girl really died under the heroic conditions described—refusing the help of the blacks, and the ladder. Of course I may have idealized *her*, but not the act. (Hearn, *Life and Letters*, 79)

舞台は奴隷解放直前のマルティニークで、主人公のユーマは、裕福な商人の夫が残した遺産で暮らすペロネット夫人のお気に入りのお抱え奴隷であった。ユーマの母親は、この夫人の一人娘エーメの乳母、すなわち「ダー」であったが、エーメが五歳の時に亡くなってしまう。その後ユーマは、読み書きこそ教わらなかったものの、エーメと一緒に、ペロネット夫人の娘の様に何不自由なく育てられる。エーメの子守女であり、心からの相談相手、また友人でもあったユーマは、エーメが大農場主ルイ・デリヴィエールと結婚し娘マヨットを産んだときにはその子のダーとなり、エーメがマヨットを残し亡くなってしまった後も、ユーマは献身的にマヨットの面倒をみる。後にデリヴィエール氏の農園の指揮長である黒人奴隷のガブリエルと恋に落ち、結婚を希望するが、ペロネット夫人に反対されてしまう。ガブリエルはそこで、ユーマに英領への逃亡を提案するが、白人の主人で自分に親切にしてくれるエーメ、ペロネット夫人、デリヴィエール氏、そしてマヨットを裏切ることは出来ず、ユーマはその提案を断る。その後、黒人の暴動が起こり、ユーマたちはデリヴィエール氏の親戚の家へ避難するが、その家にも黒人たちが押し寄せ、館に火を付ける。ガブリエルはユーマを助けようとするが、ユーマはマヨットを見殺しにすることは出来ず、そのまま炎に包まれる。

３．黒人の血

主人公ユーマは、勉学の機会こそ与えられなかったものの、その場の状況で何をすべきか、どのように発言すべきかをよく心得た、聡明な混血女性とされており、それに加えて、外見的にも美しい女性として次のように描かれている。

> She had grown up into a superb woman—certainly the finest capresse of the arrondissement. Her tint was a clear deep red;—there was in her features a soft vague beauty—a something that

> suggested the indefinable face of the Sphinx, especially her profile;—her hair, though curly as a black fleece, was long and not uncomely; she was graceful, furthermore, and very tall. […] she was one of those figures that a Martiniquais would point out with pride to a stranger as a type of the beauty of the mixed race. (Hearn, *Youma*, 13-14)

1890 年出版の『仏領西インド諸島の二年間』の第二部にあたる「マルティニーク小品」の中に収められている「有色人の娘（La Fille de Couleur）」という作品において、彼は「若く、背が高くて、上品で、肌が豊かな金色をした乳母」が盛装をしている姿を、「ビザンチン風の聖母」や「シバの女王」のようだと表象している。ユーマはここでマルティニークの混血美人の典型そのものとして描かれており、美しさをスフィンクスに例えている点や、彼女の肌の色合いの表現の仕方などは、このようなハーンの西インド諸島滞在初期の作品における彼の混血美人賛美を彷彿とさせる。

ハーンは白人至上主義の社会をあまりよく思わず、混血女性に強い魅力を感じていたが、黒人差別の面がなかったというわけではない。小説『ユーマ』のなかでハーンは黒人の血に対し‘savage’という単語をしばしば用いている。物語後半では主導者を失った黒人の暴徒たちの発言を「人喰い人種（カニバル cannibal）[2]」と表象している。彼の黒人差別の側面は、2001 年出版の『仏領西インド諸島の二年間』にラファエル・コンフィアンが寄せた「まえがき」においても指摘されており、ハーンが彼の時代の人種差別から完全に抜け出すことができていなかったことは確かであろう。

一方、混血人に対するハーンの態度は、同時代の多くの白人たちの態度とは大きく異なり、前述のユーマの人物像のように肯定的な描写が多く見られる。特にマルティニークのサン・ピエールの街の住民については西インド諸島の混血人種の中でも最も素晴らしい人種と「真夏の熱帯行（A Midsummer Trip to the Tropics）」で述べており、彼はさらにその中でも、“one rare race-type” に出会う。この“one rare race-type”は、他の混血人種とは全く違う “beautiful type” であり、これらの人々は、ヨーロッパ・ニグロ・インド人の要素が結びついて構成された人種であった。その中でも、「非常に不可思議で美しい」この混血人種の「特異な魅力」は、この三つの血の中で“the most savage”な血が創り出していた (Hearn, “A Midsummer Trip to the Tropics”, 74)、とハーンは述べている。前述のように、ハーンは黒人の血に対し何度も‘savage’という描写をしており、ここからも、上の一節の“the most savage”な血は、ニグロの血を指していると考えて間違いないだろう。つまり、ハーンが最も美しいと見なした混血人種を創り出しているのは、ニグロの血であった。また、『ユーマ』において、不器用なガブリエルとユーマの恋が“The two strange natures comprehended each other without speech, —drew and dominated each other in a dumb, primitive half-savage way. ” (Hearn, *Youma*, 73 下線引用者)と表現されている場面がある。

---

[2] There were only clamorings, —hideous threats, —utterances that seemed the conception of cannibals in delirium […]. (Hearn, *Youma*, 175)

ここでハーンは‘savage’という単語を「野蛮」といった意味として使用するのではなく、「純粋」に近い意味で使用しているのではないだろうか。これは、彼が黒人の血を、‘savage’の単語を用いて否定的に見ていただけではなく、肯定的にも捉えていたことの一つの証拠となるだろう。ハーンによると乳母であるダーは多くの場合、混血の女性であり、その中でも白人の血が強く皮膚の色が薄い混血であるメスティヴより、黒人の血が濃い混血であるカプレスの女性が多く、主人公ユーマもカプレスの女性とされている。やはり、ハーンにとって混血の美しさには黒人の血が不可欠であったようだ。

４．西インド諸島における白人（ベケ）

ハーンはまた西インド諸島に住む人々の外見的な表象だけではなく、彼らの抱える問題や植民地の社会問題にも目を向けている。小説『ユーマ』のベースのひとつになっていると考えられるハーンのエッセイ、「西インド諸島における混血人種考（Study of Half-Breed Races In the West Indies）」および「西インド諸島―肌色の多様なその社会（West Indian Society of Many Colorings）」は、1890 年出版の雑誌『コスモポリタン』に掲載された記事であり、この二つの記事において、彼らの抱える問題に対するハーンの考えが特に表れている。

植民地社会の複雑な問題の一つとして、ハーンは、植民地における「奴隷の主人」と同時に「白人」を意味する「ベケ」の存在に注目している。彼らは、植民地の歴史や政策が生みだした複雑なアイデンティティを持つ人種であった。彼らは、植民地の黒人たちや混血人たちからは恨みを買い、宗主国の白人たちからは「白いゴキブリ」と呼ばれていた。ハーンは「西インド諸島における混血人種考」において、このような白人クレオールたちが混血に対して取っていた頑なな態度を、「マルティニークの混血の男たちが権利をもぎ取り、政治的には白人と同権になったにもかかわらず、白人クレオール達は偏見から彼らを同等と認めなかった（Hearn, “Study of Half-Breed Races”, 226）」、また、「白人クレオール女性は、白人が他の人種と交わり吸収されてしまうことは、絶滅するよりはるかに恐ろしいことなのだと、本能のままに信じている（Hearn, “Study of Half-Breed Races”, 231）」と指摘している。しかし、これらの指摘は、白人クレオールたちが置かれた苦境・苦悩に対する正確な理解から行われたものとも言える。ハーン自身、「西インド諸島―肌色の多様なその社会」では、彼らを肯定的に捉え、「白人クレオールの主人は家内奴隷を養子のように考え、親のような愛情を彼らに抱いていた（Hearn, “West Indian Society”, 237）」と、白人クレオールの保護者的な一面について指摘している。ハーンに言わせるなら、白人の主人が厳しく残酷であったと考えるのは「誤り」であり、黒人の乳母ダーに育てられ、彼女らの中で育った植民地生まれの白人クレオールの奴隷所有者が、黒人たちに不親切な感情を抱くことはなかった。ただし、社会慣習が彼らの幼いころの思い出を消し去り、人種差別的考えを押し付けるようになったのだと言う（Hearn, “West Indian Society”, 237-238）。小説『ユーマ』においても、白人の子供で四歳のマヨットは、玄関で黒人の子供たちを眺

めながら黒人の女の子になりたい、と呟く。そしてユーマの肌の色をチョコレートに例え、美しいと言う （Hearn, *Youma*, 45）が、その一方で若い白人でユーマに面と向かって称賛のことばを述べた者はほとんどいなかった、とも述べている[3]。

ハーンはまた、エッセイ「西インド諸島―肌色の多様なその社会」で、政治的な動きが、昔ながらの植民地生活の詩情と素朴さを破壊するだろうと指摘している。

> [S]o will politics surely destroy the poetry or simplicity of the old colonial life. For there was an intimate inner domestic life never stirred by caste prejudices and political antagonism—a patriarchal life which despite various evils inherent to it was characterized by a tenderness and sympathy full of human poetry. (Hearn, "West Indian Society", 237)

ハーンにとって、昔ながらの植民地の生活から失われるのが惜しまれるものは、乳母や島特有の衣装、そして家父長制度下の生活であった。この生活は、階級の偏見や政治的対立によってかき乱されることなく、詩情あふれる優しさと共感に特徴づけられている生活であったと彼は言う。『ユーマ』に登場するデリヴィエール氏のアンス・マリーヌの農園での生活が、まさしくそれにあたる。

> But at the time when the Desrivières owned Anse-Marine, plantation life offered an aspect very different to that which it presents to-day. On this estate in particular, it was patriarchal and picturesque to a degree scarcely conceivable by one who knows the colony only since the period inaugurated by emancipation. The slaves were treated very much like children: it was a traditional family policy to sell only those who could not be controlled without physical punishment.（Hearn, *Youma*, 277-278）

デリヴィエール家では、奴隷たちは子供と同じように扱われたとされている。しかしこの農園生活は、奴隷解放後の植民地だけしか知らない者には到底想像もできない、すでに失われてしまった生活である。すでに述べたように、白人クレオールは、かつては家内奴隷に対し保護者的感情を抱き、自分の子のように愛情を注いでいたとハーンは考えていた。小説『ユーマ』のペロネット夫人も、このような白人クレオール像に当てはまる存在である。ペロネット夫人はユーマの名付け親であり、ユーマを自分の娘エーメの姉妹のように育てた人物として描かれている。夫人はユーマに読み書きは教えなかったが、それは彼女に勉学の機会を与えても、奴隷としての身分からは脱け出すことができず、不満を抱かせるだけだと考えたからであった。夫人はまだ若いユーマを奴隷の身分に置くことによって、彼女を道徳的・法律的に保護し、危険から守ろうとしていたのである。そして、ユーマが

[3] There were few young whites, nevertheless, who would have presumed to tell their admiration to Youma.（Hearn, *Youma*, 15）

いまの生活よりも幸せになるのであれば、すぐに自由にしようと考えていた。以下は、ハーンの「西インド諸島―肌色の多様なその社会」からの引用である。

> In at least four cases out of five the creole master regarded his household slaves as adopted children and felt a kind of paternal affection of them. It was never among these household slaves that the spirit of revolt or discontent made progress, but among the freedom and the mass of black plantation-hands who knew the master chiefly through his overseer. (Hearn, “West Indian Society”, 237)

ハーンはここでも、白人の主人が厳しく残酷であったと考えるのは「誤り」であり、家内奴隷の間に反抗精神が芽生え、不満が募ったことは一度たりともなかったと述べている。

しかし、はたして本当に、不満や不親切な感情が、家内奴隷の間に生まれることはなかったのだろうか。夫人は確かに、奴隷の身分から解放されるという「自由」以外は何でもユーマに与えた。華やかな衣装や装身具を買い与えられたユーマには、そのような点で解放された者たちを羨む理由もなく、また「自由」になることについて悩んだこともなかった（Hearn, *Youma*, 269-270）。しかし、黒人奴隷のガブリエルとの結婚を反対されたとき、彼女ははじめて「自分は奴隷である」ということを強く自覚する。

> …To Youma this decision brought a shock of pain that stupefied her too much for tears. Then, with the instinctive, automatic resentment that sudden pain provokes, came to her also for the first time the full keen sense of the fact that she was a slave—helpless to resist the will that struck her. Every disappointment she had ever known—each constraint, reprimand, refusal, suppression of an impulse, every petty pang she had suffered since a child—crowded to her memory, scorched it, blackened it; filled her with the delusion that she had been unhappy all her life, and with a hot secret anger against the long injustice imagined, breaking down her good sense, and her trained habit of cheerful resignation. In that instant she almost hated her godmother, hated M. Desrivières, hated everybody…except Gabriel.（Hearn, *Youma*, 308-309）

「自分が奴隷だという事実に対する完全かつ強烈な意識」に襲われたユーマは、過去のあらゆる失望や痛みを振り返り、「自分はこれまで一生不幸だった」という「錯覚」さえ抱いている。『ユーマ』は、前述したように、実際に起こった事件をもとにハーンが書いた物語であるが、ユーマの人物像のほとんどは、ハーンの想像によるものだろう。その彼女でさえ、白人の主人に不満を抱くにいたっている。ましてや、家内奴隷に反抗精神が芽生え、不満が募ったことは一度もなかったという、ハーンのもう一方の言説は、「古き良き植民地時代」を理想化しすぎたものと言わなければならないだろう。

植民地の白人クレオールたち全員が、『ユーマ』に登場する白人たちの様に、奴隷に対し

て「保護者」的な思いやりの態度で接していたとは考えにくいが、その逆に、白人クレオールのすべてのすべての者が黒人奴隷に対して厳しく残酷であったと考えるのも間違いであろう。白人クレオールに関するハーンの言説に懐古趣味が含まれていることは否定できないが、それは矛盾を犯していると言うよりも、単純に一枚岩的に捉えることの出来ない白人クレオールの状況を、正確に複合的に捉えようとした結果と見ることもできるのではないだろうか。ルイ・ソロ＝マルティネルは「マルティニークにおけるハーン評価の変遷」において、当時の白人系島民が抱いていた、共和制の到来による新制度や普通選挙による脅威、混血階級という増大する脅威、ハーンはこれらの「苦悩の代弁者」であり、白人クレオール作家たちは、ハーンが連体感とまでは言えなくても、このような苦悩に理解を示していたことに感謝していた、と述べている（マルティネル 2009：103）。しかし小説『ユーマ』だけを見ると、このような白人クレオールの苦悩というのはあまり見えてこず、懐古趣味的で、理想的な白人像が浮かび上がってくる。この点においてはこの小説の弱さを感じられずには入られないだろう。

４．西インド諸島における混血人種

また、白人クレオールだけでなく混血人種の複雑な社会関係についてもハーンは着目している。彼は「西インド諸島における混血人種考」で「奴隷制における最大の過ちは、混血人種を生み出したことだ[4]」と主張している。しかしハーンは、ダーたちを、奴隷制から生れたものの中で、失われるのが唯一惜しまれるものだとも述べている。『ユーマ』の冒頭は、植民地における黒人奴隷乳母、「ダー」の論から始まる。それによれば、ダーは養母と子守女を同時に兼ねた存在であり、白人クレオールの子供は、上流階級の白人の産みの母親と、奴隷として雇われた黒人の育ての母親、二人の母親を持っていた。しかし、子供の面倒はすべてダーが見ていたため、白人クレオールの子供たちは産みの母親よりもダーに愛着を覚えていたと言う。

> The da is already of the past. Her special type was a product of slavery, largely created by selection: the one creation of slavery perhaps not unworthy of regret—one strange flowering amid all the rank dark growths of that bitter soil. (Hearn, *Youma*, 263)

ここでハーンはダーを、奴隷制の土壌に咲いた一輪の珍しい花に例える。混血黒人女性のダーは、白人と黒人の両者が和解するきっかけになることも考えられたが、過去のものとなってしまった。ハーンは、未開人と文明人 “savage and a civilized races” (Hearn, “Study of Half-Breed Races”, 221)、すなわちアフリカ人女性と白人の主人の間から生まれた混血の子どもたちは、この両者の和解のきっかけになることも考えられるが、西インド諸島で

[4] The greatest error of slavery was that which resulted in the creation of the mixed races. (Hearn, “Study of Half-Breed Races”, 221)

はむしろ、この混血人種が自分たちの親である白人・黒人の両人種の仲を永遠にこじらせる要因となったと考えていた。また「有色人の娘」では次のように述べている。

> The history of the *hommes-de-couleur* in all the French colonies has been the same;—distrusted by the whites, who feared their aspirations to social equality, distrusted even more by the blacks (who still hate them secretly, although ruled by them), the mulattoes became an Ishmaelitish clan, inimical to both races, and dreaded of both.　（Hearn, *F.W.I,* 260-261）

ここでハーンは、白人からも黒人からも信用されず、両方の人種に敵意を抱き、両方の人種から恐れられた混血人種を、「イシュマエル的」であると指摘する。イシュマエルは、旧約聖書にあるアブラハムと、その妻サラが所有する女奴隷ハガルとの間の子供で、正妻であるサラが身ごもった後は、母子ともに荒野に追いやられる。混血人たちが実際に植民地から追い払われたわけではないが、ハーンは、彼らが社会的に追いやられている状況を示唆しているのであろう。この「イシュマエル」の譬えは、「西インド諸島――肌色の多様なその社会」にも登場する。

> Ishmael and Hager driven from the paternal roof have returned to banish Abraham and Sarah to the wildness. (Hearn, “West Indian Society”, 238)

ハーンはここで、イシュマエルを植民地における混血人に、ヘイガルを黒人に、アブラハムとサラを白人に置き換えている。社会的に追いやられていた混血人は、白人と同権となると立場が一転し、今度は白人たちを荒野に追いやるために、黒人たちと手をとりあったことが、この聖書の物語の引用に示唆されているのだ。

そして小説『ユーマ』のクライマックスでもこの状況が表されている。前述のように、ハーンはユーマのキャラクターを造形するにあたり、モデルの女性を理想化して描いたものの、彼女の行動そのものは史実である。その女性と同じように、ユーマは、窓辺に立って黒人たちに抗議し、白人の子供を守ろうとする。このクライマックスの場面は、小説『ユーマ』の中で最も重要な場面のひとつと言えるだろう。黒人の暴徒が押し寄せ、館に火をつけた後、怒号が飛び交う中、ユーマは窓から姿を現し、彼女は群集の中に一人だけ「立派な服装をした混血人」を見つけ、次のように言う。

> “You were with the békés yesterday, the day before yesterday, and always—every one of you. The békés gave you eat—the békés gave you to drink—the békés cared for you when you were sick…The békés gave *you* freedom, O you traitor mulatto!—gave you a name, saloprie!—gave you the clothes your wear, ingrate! *You*!—you are not fighting for your liberty, liar!…I know you!…coward without a family, without a race!…”（Hearn, *Youma*, 366-367）

この「立派な服装をした混血人」には、西インド諸島におけるイシュマエル的な混血人の姿そのものが表されている。彼らはつい昨日まで白人（ベケ）と一緒に暮らし、世話をしてもらっていたが、黒人たちが頭角を現すと、手のひらを反すように黒人側についたのだ。

中村（2009）は、ハーンの「奴隷制における最大の過ちは混血人種を生み出したことだ」という主張について「当時この記事を読んだ人は、この「罪」の意識を、たんに奴隷制度と奴隷女性の性的搾取への反省としてではなく、黒人と混血することそのものが罪だという倫理観を前提にしたものとして理解したであろう。白人と黒人の結婚を禁じていたオハイオ州シンシナティで奴隷だった女性の娘と結婚したこともあるハーン自身の人生を考えれば、彼がこうした倫理観をほんとうに信じていたとはおよそおもわれない」と指摘している。中村の言うように、「奴隷制における最大の過ち」とは、ハーンにとって、黒人の血が入った混血人種を生み出したことよりも、複雑な植民地問題、とりわけ、混血人種が置かれた困難な状況を生み出したことにあったのではないだろうか。

５．おわりに

ハーンは、西インド諸島の混血人種の肌の色の種類、そして彼らが抱える複雑な社会問題の色調、それらはクレオールの眼には捉えることが可能であるが、異国人の眼にはその差異を判別することは難しい（Hearn, “West Indian Society”, 232-233）と主張している。また、ハーンは「有色人の娘」において次のようにも述べている。

> But no hasty observation could have revealed the whole character of the fille-de-couleur to the stranger, equally charmed and surprised: the creole comprehended her better, and probably treated her with even more real kindness. (Hearn, *F.W.I*, 256)

ここでもハーンは、「よそ者」が有色人の女性にいかに魅せられ、驚かされたとしても、彼の観察にその全容が明らかになることはなく、クレオールこそが彼女たちの一番の理解者であると認めている。アイルランド人の父とギリシャ人の母との間の混血であるハーンは、社会状況が違うとはいえ、少なからず西インド諸島の混血たちに自らを重ねていた部分もあるだろう。しかし彼は、あくまでも「外国人／よそ者」としての自分自身の限界も自覚していた。自らの限界を感じていたからこそ、人種の結束ではなく人間としての繋がりを選んだ少女を、ハーンはテーマとして選び『ユーマ』を執筆したのではないだろうか。

彼の「真夏の熱帯行」や「有色人の娘」に見られた混血賛美、「西インド諸島における混血人種考」や「西インド諸島―肌色の多様なその社会」に見られた西インド諸島の社会や人々の苦悩に対する理解などが、小説『ユーマ』には集約的に表されていると言える。『ユーマ』はハーンが西インド諸島滞在中に見聞したこと、帰航後に調査・研究したこと、そのうえで執筆した作品群の集大成と見なすことができるだろう。平井（1976）が指摘しているように、小説的効果を無視して、あるいは小説の形式を踏み外して、西インド諸島の

社会と人々について思うがままに書き綴った作品であるからこそ、小説『ユーマ』には「異端の文学者ハーンの本領」が「濃厚に表出」され、また、ハーンという人間の本質も少なからず表されることになったのではないだろうか。

参考文献

Confiant, Raphael. “Lafcadio Hearn: The Magnificent Traveler” *Two Years in the French West Indies*. New York: Harper & Brothers, 1890 (reprinted Massachusetts and New York: Interlink Publishing Group, Inc., 2001). ix-xii. Print.

Hearn, Lafcadio. “A Midsummer Trip to the Tropics” *Two Years in the West Indies*. New York: Harper & Brothers, 1890 (reprinted Massachusetts and New York: Interlink Publishing Group, Inc., 2001). 1-74. Print.

- - -. “A Study of Half-Breed Races In the West Indies” *An American Miscellany by Lafcadio Hearn articles and stories now first collected by Albert Mordell volume Ⅱ*. New York: Dodd, Mead and Company, 1924. 221-231. Print.

- - -. “La Fille de Couleur” in *Two Years in the West Indies*. New York: Harper & Brothers, 1890 (reprinted Massachusetts and New York: Interlink Publishing Group, Inc., 2001). 242-265. Print

- - -. “West Indian Society of Many Colorings” in *An American Miscellany by Lafcadio Hearn articles and stories now first collected by Albert Mordell volume Ⅱ*. New York: Dodd, Mead and Company, 1924. 232-242. Print.

- - -. *Youma; the Story of a West-Indian Slave*. Miami: HardPress Publishing, 2013.Print.

小泉八雲（1976）『仏領西インドの二年間上』平井呈一訳、恒文社、1976。

－－－.『仏領西インドの二年間下』平井呈一訳、恒文社、1976。

中村和恵「カラードの幻惑―『仏領西インド諸島の二年間』にみるハーンの人種観」『ハーンの文学世界』平川祐弘・牧野陽子編、新曜社、2009：127-155。

ハーン、ラフカディオ「西インド諸島における混血人種考」『ラフカディオ・ハーン著作集第一巻』平川祐弘/他訳、恒文社、1980：419-428。

－－－.「西インド諸島―肌色の多様なその社会」『ラフカディオ・ハーン著作集　第一巻』平川祐弘/他訳、恒文社、1980：429-438。

平川祐弘『カリブの女』河出書房新社、1999。

－－－.「ハーンにおけるクレオールの意味―ルイジアナ、マルティニーク、日本」『ハーンの人と周辺』平川祐弘・牧野陽子編、新曜社、2009：15-49。

－－－.『ラフカディオ・ハーン 植民地化・キリスト教化・文明開化』、ミネルヴァ書房、2004。

マルティネル、ルイ＝ソロ「マルティニークにおけるハーン評価の変遷」『ハーンの人と周辺』森田直子抄訳、平川祐弘・牧野陽子編、新曜社、2009：98-117。